

## 【論考】

### 南島歌謡および本土民謡に

#### あらわれた航海者の視座

——その日本の文学の視座史のなかでの位置——

中小路 駿 逸

はじめに

自己と、自己のおかれた世界との関係を、観察し、感じとり、表現しようとするときに、自己自身を置くところの位置——それによって、描き出される世界および自己の姿に、遠近の秩序が生じ、あるいは強調ないし誇張、曖昧化ないし欠落といった“びずみ”が生じる——、それを「立場」もしくは「視座」と呼ぶことにする。

このような「視座」、およびそれにしたがって描き出される世界の姿は、古今東西、人類社会全体にわたって

認められるものと想定されるが、その全体像についてのくわしい考察は、のちのこととする。

主として日本の文学についていうと、そこには、ある時期まで、身を海上に置き、海上から陸地を観察し、その陸地上の物件ないし事象と自己との関係をとらえて表現する、という視座があった。私はこれを「船乗り型視座」と呼ぶ。

ところが、ある時期以後、その視座は文学の主流から消え、これとは逆の視座、すなわち、身を山に囲まれた地に置いてそのなかに自己のスミカを置き、四方の山を自己のスミカの結界とし、その結界にある事象、その代表的なものをいえば、春は山に霞がたなびき、夏は山からホトトギスが来て鳴き、秋は月が山から出て山に入り、冬は山に雪が積もる、という世界の描きかたを生む視座が主流となる。この視座を、私は「盆地農民型視座」と呼ぶ。

「盆地農民型視座」とは呼んだが、むろん、この視座のなかには、海を視野に入れた場合も含まれる。が、その場合その海は、ナギサのウチに立ち、もしくはナギサを背にしてとらえられているのであり、海上に身を置いてナギサないしそこよりも奥の陸地を望む場合を含まない

い。つまり航海をこととする人間の立場を典型としては  
いない。陸地のウチに定住して耕作する人間の立場が主  
流ないし典型をなしていると考えられる。ゆえに「盆地  
農民型視座」と呼んでおくのである。

そして右の「ある時期」以後、それはおよそ八世紀以  
後現代までの日本文学、したがって日本文学史のほぼす  
べてを覆う時期を通じて、「盆地農民型視座」が主流を  
なし、「船乗り型視座」ないし「海洋民型視座」は、と  
きに復活のような事象を示しながら、結局十分には復活  
せずに現代にまでいたっている。

そのことの次第は、いくつもの事象を根拠として、い  
くつもの論考によってすでに述べてきた。いまここにし  
るしたのは、ことがらを極度に要約したものである。

いま、ふりかえってみると、まだ述べていない事象が  
いくつもあり、そのなかに、南島の諸歌謡および各地に  
伝承された民謡のたぐいにあらわれた事象のことが含ま  
れている。

ここに、それについて、いま知りえていることがらの、  
骨格を述べる。

## 一 古代海洋文明とその消滅および残映

これまたすでに述べたことではあるが、順序として、  
すでに述べたことの要点に、少し補いをつけ加えて述べ  
る。

『古事記』のなかに、出雲の地に存在した権力にかか  
わるものと思われる歌謡と物語が収められていて、その  
なかに次の例がある。

爾に其の後、大御酒坏を取り、立ち依り指挙げて  
歌ひたまひしく、  
八千矛の 神の命や 吾が大国主 汝こそは 男に  
坐せば 打ち廻る 島の埼埼 か搔き廻る 磯の埼  
落ちず 若草の 妻持たせらめ 吾はもよ 女にし  
あれば 汝を除て 男は無し 汝を除て 夫は無し  
綾垣の ふはやが下に 苧衾 柔やが下に 栲衾  
さやぐが下に 沫雪の 若やる胸を 栲綱の 白き  
腕 そだたき たたきまながり 真玉手 玉手さ  
し枕き 百長に 寝をし寝せ 豊御酒 奉らせ

(上巻)

陸地が「打ち廻る 島の崎々」や「搔き廻る 磯の崎」というかたちでとらえられている。陸地をこういうかたちでとらえる視座、それは明らかに、身を海上に置き、海上から陸地を、航海のための目じるし、ないしは寄港地としてか、もしくは避けるべき障害としてか、ともかく何らかの意味での目じるしとして認識する視座である。これはすなわち「船乗り型視座」にはかならない。そして右の例は、歌謡の話主を「后」だとしている。

すなわち歌いかけられた相手の男を「王」だとしているのである。王を有し、当然ある種の権力構造を有する集団ないし勢力が、前記の「ある時期」よりも前に、船舶の建造および修理のため、および食料の生産と補給、すなわち農耕のための陸地ないし沿岸の領土をも有したであろうと同時に、運送、交換、戦闘をも含む海洋文明のなかにいたであろうことが、ここに想定されてくるのである。

その文明の担い手に、交替にあたる変動があったことは、たとえば『古事記』の物語にもすでに語られている。右の歌謡よりも前に、その王は兄たちの勢力を排除したと語られているのが、その証跡の一つである。

そのあと、前記の「ある時期」よりも前に、交替と

いってよい事件が少なくとも一回あったことが、また語られている。『古事記』上巻、『日本書紀』巻第二（神代下）にある、いわゆる「国ゆずり」の話、高天原の勢力が「皇孫」のために出雲の勢力に国をゆずらせて「皇孫」を王として九州にくだしたという話がそれである。

そのあと、途中の紆余曲折の全貌はなお定かではないが、やがて前記の「ある時期」がやってくる。海洋文明のなかにあった勢力が、白村江で敗れ（その年は、関係史料のなかでもっとも成立年代の早い『日本書紀』によれば六六三年である）、やがて崩壊、消滅する。その勢力の中心は、九州にあった。

かわって中心となったのが、右の勢力の傍流とみずから認める大和の王権であった。文武天皇即位（六九七）ののち、「皇孫」以来の王権がつづいて当代にいたったことが宣言される。そのときまでは、初代神武から前代持統にいたるまで、この王権は九州の王権の傍流、分流の格だったのであり、ここにその傍流、分流が、本流の格を継承したのである。

そして、このあらたな中心的王権のよって立つ文化の主流こそ、ほかならぬ「盆地農民型視座」のものなのであった。海洋文明は主流から去り、ないしは消し去られ、

「船乗り型視座」に立つ文学作品は、そのほとんどが消え、ないしは消された。いまに伝わる『古事記』、『日本書紀』、『風土記』、『万葉集』など八世紀成立の諸文献は、この変動のあとに編まれたものである。

『万葉集』と『続日本紀』に、一つの歌謡がしるされている。

(初略) 海行かば 水漬<sup>みづ</sup>く屍<sup>かばね</sup> 山行かば 草生<sup>くさむす</sup>す屍

大君の 辺<sup>へ</sup>にこそ死なめ 顧<sup>かへ</sup>みは せじと言<sup>こと</sup>立て

(後略) (巻第十八 大伴家持 賀陸奥国出金詔書歌 四

〇九四)

(初略) 海行かば みづく屍 山行かば 草むす屍

王<sup>おほきみ</sup>の へにこそ死なめ のどには死なじ」と(後

略) (巻第十七 天平勝宝元年四月 宣命第十三詔)

大伴氏、あるいは大伴氏、物部氏が伝えてきたというこの歌詞に歌われているもの、それは、明らかに、兵たちや部将たちが、時と所により、水上でも戦い、陸上でも戦い、ときには水辺において水陸両用戦を実施する、そういう、水軍の要素をも陸軍の要素をも、海兵隊ないし陸戦隊の要素をも含む軍隊の姿である。戦闘者たちの

戦いと死とは、陸地内でも起こりうるし、海上でも起こりうるし、海や川の岸辺でも起こりうるし、戦死者の遺体は、水に浮き沈みすることも、山野に朽ちることもありうるのである。なお言えば、これらの戦闘者たちの戦いと死とは、つねにかれらのいたたく「大君」のすぐそばで起こる。かれらのすべてを指揮する「大君」は、つねにかれらのすぐそばにいて、かれらに号令し、かれらを叱咤し、かれらを鼓舞し、かれらに榮譽を与えつつけるのである。

ここに歌い出された軍隊の姿、それは、いまに伝わる律令(養老律令)に規定された軍隊の姿とは、明らかに異なる。律令にある軍隊は、陸軍だけである。水軍も陸戦隊ないし海兵隊もない。水上戦や水陸両用戦を実施するために必要な、艦船の建造と維持、艦隊ないし水陸両用部隊に属する兵員の装備や訓練についての条項が明記されていない。

すなわち、右の歌詞にあらわれたものは、八世紀においてはすでに現実とは異質なものとなった、過去の海洋文明の残映と考えられるものである。言いかえると、右の歌詞もまた、『古事記』の出雲の歌謡と同様に、この列島の古き世に、海洋文明およびそのなかに立てられ

た権力の存在と、それが八世紀には消え、もしくは消されていることを、さし示しているのである。

そして、これからあとの日本文学の主流は、次の和歌にみられるような視座によってのみ占められるようになる。

なごの海の霞の間よりながむれば入る日をあらふ沖  
つ白波（新古今和歌集卷第一春歌上 後徳大寺左大臣）

右は、ナギサのウチに身を置いて、沖の方向へと眺めた立場のものである。

わだの原漕ぎ出でてみればひさかたの雲居にまがふ  
沖つ白波（詞花和歌集卷第十 雑歌下 法性寺入道前関白太政大臣）

右は、身をナギサから海上へと進め、ただしナギサの方向へはふりかえらず、依然として沖の方向だけを眺めている立場のものである。

海上から陸地を眺める立場は、『万葉集』の柿本人麻呂の歌など、臨時の旅行をする旅人の作にあらわれ、そ

のあと、謡曲などにわずかに姿を見せながら、結局視座の主流にはならず今にいたっている。

ただし、ここに、とりあげておかなければならない作品がある。沖繩ないし南島の地域の歌謡、および本土の諸地域に伝承されてきた民謡の歌詞がそれである。

## 二 『おもろさうし』その他南島歌謡に

あらわれた航海者の視座

### 『おもろさうし』の場合

『おもろさうし』（一六世紀成立）に、次のような歌詞がみられる。類想のものがいくつもあるが、ここには二例のみ掲げる。

一 里中のころがま 一の權 真強く 欲へ子が

守りよわるゑそこ 又 としらもいころがま

又 田皆嶽見居り 又 西銘嶽 見居り 又

せりよさのはつき 走へ東居り あけより（九

四〇）

一 そよめきぎや もちよる 神にしやが もちよ

る で 吾 しくたんか 又 真南風 吹き居

れば 追手風 吹き居れば 又 おわん嶽ぬ

き当てゝ てらち嶽 たけ ぬき当てゝ (九五〇)

(第十三 船倉とのおもろ御さうし はつにしやが節  
日本思想大系)

風を考え、櫂をあやつり、山の姿を観察し、目あてにしつつ船を進める。船乗りとして当然の、それに熟達しなければおのれの、さらには部族の、生命にもかかわることがらを、しっかりと踏まえて行動する人間の姿が、ここにある。そしてこの場合、その視座が、海の上に据えられ、海から陸地が眺められていることは、いうまでもない。

このたぐいの歌詞のすべてを枚挙して分析することは別の機会にゆずる。ここには、ただ、海洋文明があればそれにともなつて存在してなんの不思議もない歌詞が、ここにはある、という一事を指摘するだけで十分である。

『おもろさうし』以外の南島諸地域の歌謡の場合

『おもろさうし』以外の南島諸地域の歌謡についてみよう。

沖縄本島については、次のような例がある。

あわれ愛し君南風 きみなみかぜ 〈くりかえし。以下略〉 久米の  
君南風 弟君南風 頭川の泊 かしらかう とまり 頭川の港 きり (坂清らは) おし浮けて 棚清らは (おし浮けて) 船子選て乗  
せて 銀 なみ 櫓 やしこ 締め出きやち 黄金櫓持て出きや  
ち 綾の弥帆 あや 煽らちへ もじろ 弥帆 あや 煽らちへ 糸帆 いとほ  
あけて走れば 布ほ上けて走れば 後 (と見) れは  
雨ぐれ 先 (見れ) は風ぐれ 東嶽は崇へて 西嶽  
は崇 (べて) あま溝の真渡中 (し) によ溝の真渡中  
磁石 ちせき てる石 (その) 真金 まかね てる石の むめき湧きや上  
かれは さめき湧きや上かれは 逆手押はらて 宮  
古嶋走れ着 平島に走れ着 (中略) 宮古嶋鎮めて  
平島は鎮めて 東嶽は崇へて 西嶽は崇へて 久米  
島 (発て) 金の嶋発てて 二股も走れ過 群れ島  
も走れ (過) 那覇泊走れ着 黄金口走れ着 (安)  
里橋押し上かて 三 (次き橋押) し上かて 下綾門  
に上て 上綾門に上て 欲 (まへ門に) 上て 下の  
庭に押し上て 前の庭に押し上て (中略) 那覇泊  
降れて 黄金口降れて 真謝泊一走ら 黄金口一  
走ら 綾庭に押 (じあか) て 上間森押し上かて  
(間切くわいにや 『南島歌謡大成』 I 沖縄篇上 P 一七  
五 『君南風由来并位階且公事』内は 『君南風之始相伝

記』による補入)

今日の良かる日に 神が船 接け浮けて 山見れば  
雨びかい 海見れば 波荒さ 真口出アアち 走ら  
ちけは持たちけば シンケ干瀬 恐ろさんど 畏め  
さんど い走れ走れ しゃい走んしゃ 岩に立つキ  
ンバイク 肝安持ツチャウれ でんの颯の時取が  
神が上や なさんど 颯が上ど なすんど 浜崎の  
拜まれんど 大崎の 拜まれんど ガエイヤ嶽の  
拜まれんど ガエイヤ森の 拜まれんど 弁の嶽の  
拜まれんど 那覇港 拜まれんど 首里森 拜ま  
れんど(後略)(ウムイ フナオモイ(久志間切) 七二  
『南島歌謡大成』I 冲縄篇上 P三五七『諸間切のろく  
もいのおもり』類想歌 三八六、四五九、四九五など  
がある。)

右の例には、帆のことも、櫓のことも、歌い込まれて  
いる。

宮古地域については、次のような例がある。

旅葉意の真道乗安期とそ 船ばいの真鱸ぬり安期と  
そ 大親主の主方の仰せの 嘉例吉ん御物積でや

まれば 三艘船んみやもの積てやまれば 宮古皆の  
立の数御物や 御藏中蔵の宮寄を取り 嘉例吉ん  
積ぬ乗せおきばど 真南風根や立直り押れば 肝急  
げ船出せやまれば 綱取やはぬ引やね帆させ 沖縄  
とん美御前とん持たせば 波や押さいや押ぬけとい  
一夜籠め明りすとむでんや 嘉例吉が鱸真ん中から  
久場おたけ前立拜めば 嶋拜み並讀りしゆれきやや  
那覇湊直指し走れ行け 隣だけや里だけ通ふにや  
ん 端盛らせ満つなけな今の梶(旅葉意安屋 期七篇  
出船祝言(1) 四二『南島歌謡大成』III 宮古篇『宮古  
島の歌』P四三七)

八重山地域については、次のような例がある。

引じ曲りんなびじ曲 三棚舟 三道舟ば造し(中  
略) 先はら 見て見ば 前引美すら 掛無舟 後  
はら見て見ば 鱸引美 若月たらし居ば 余ぬ嬉ん  
中場はら 見て見ば 計桁たらし 浮ぶなりば(中  
略) 余ぬ嬉ん 走んな走 行んな行 大岩並んな  
古見岳 八重岳ん はかる雲 いかしかやて見りば  
ど 麦焼節の 麦焼少女 達煙にん 尾 引な引

座な座居りば 風生んさみ 上や仕出るんさみて  
 余ぬ嬉やん 走んな走し 行んな行 ブラ石並ん  
 な 保里村乙女てん居うぬ 我送んかや 殿送ん  
 かやて 後向見りばど 六月ぬ 浜蟹ぬ下るにん  
 諸集 招き 居りば (中略) 赤那口 通んど  
 我舟 早先 何程しど 通りぶるかやて 先はら  
 見らて見りば 先はら 切しる潮や 干瀬波ぬ  
 折るにん 二十歳乙女ぬ 笑にん 折な折居ば 余  
 ぬ嬉ん 舵間ぬ舵うして 潮見りばど はない布ば  
 うち広にん 十尋布ば うち広にん 通りぶりば  
 余ぬ嬉ん 中真はら 見らて見りば 釘柱な は  
 かる潮や 月夜照し 日ま照し居は (中略) 竹富ぬ  
 東はら 仲嵩ぬ東はら走 大島並んど 我島  
 生島 ばたし細工た ばたしぬびい 指るにん 沈  
 んなきな びいんなき 我島ん 散やす果て見り  
 走んな走 行んな行 (後略) (五〇南風保多ふんたか  
 (黒島) 『南島歌謡大成』 IV 八重山篇 『黒島民謡集』 P  
 一四七 類想歌 (浦舟じらば) (石垣島登野城村) (ハ)  
 びぎりや船のうどうまちる P 二〇一 『八重山古謡』 上  
 がある。)

右の例には、風のこと、潮流のことも、歌い込まれて  
 いる。

奄美地域については、次の例がある。風のこと、波の  
 ことも、歌い込まれている。

六 舟や押し出せば 波風ぬまかし わどやうし  
 じゃさば なきやにまかし

一二 割り舟ばはけて ヤク曾根ば漕げば 南風吹  
 けば 命はまる

一三 ヤク曾根ぬ目当て 赤木名ぬ岬 わが目あてし  
 ゆす 加那やあらめ (八月踊り歌 南島歌謡大成

P 三六三)

いずれも、その視座は、『おもしろさうし』にみられた  
 ものと同類のものである。

すなわち、あって当然のものが、あって当然の地域に、  
 あるわけなのである。

これは何をさし示すのか。必然的にそれは、瀬戸内地  
 域、朝鮮・対馬・壱岐三海峡地域およびその東西の北陸  
 地域、九州西部地域などに、あって当然のこの類の作品  
 が、古来作りつづけられ、伝承されていて当然なのに、

「ある時期」以後欠落し、そしておおむねそのまま現代にいたっているという事実を、浮かびあがらせ、さし示しているのである。

### 三 本土民謡にあらわれた海洋民の視座

近代にいたって採録され公刊された本土諸地域の民謡のなかに、この種の航海者ないし海洋民の視座に立ったものがみられる。その地域の民謡の全体にわたって比較的多くの歌詞を収録したもので管見に入ったものは『愛媛の民謡』と『広島県の民謡』とであり、その他の諸地域についてのものは、『日本民謡大観』に収録されたものであって、資料としての精粗の程度は、比較にならない。愛媛、広島以外の、瀬戸内、日本海岸の諸地域のものについても、当然、くわしく調べるべきものであるが、それは将来の課題である。

ここには、いま知りえている範囲内での、現在の知見を述べておく。

船歌・櫓漕歌・船頭歌の類には、次のような例がある。

天満走り出てヨー 仏崎見ればヨー 島が見えます

金島がヨー ヨイヨーく (愛媛県 新居地方 新居浜市大島『愛媛の民謡』)

淡路島から大阪が見える 大阪天王寺の五重の塔が。

(愛媛県 新居地方 上浦村町盛『愛媛の民謡』)

島が流れる屋島の島が つなぎ止めたい淡路島。

(愛媛県 新居地方 大三島町『愛媛の民謡』)

また、次のような例もある。

イヤーレー備前今朝出てはや高松のヨー 城が見えます  
ちらりとヨー

(船漕唄二 舟唄―五挺櫓の唄 香川県 大川郡引田町

『日本民謡大観 四国篇』)

ヤーセノヤセー (ホヤッセ) ヤーサノヤセー (ホヤッ

セ) ヤーセーホー (キタカホイサ) あのだき越えれば

ナまたさきでてくるナ囃しを揃えてナ 櫓先揃えて

ナ 揃えてホーエー (キタカホイサ)

(舟漕流し唄 (釧路地方) 『日本民謡大観 九州篇(南

部) 北海道篇』)

資料によって地域ごとに精粗の差はあるものの、この

種の例は全地域を通じ、南島にみられるものに比して、きわめて少ないといわなければならない。航海者ないし海洋民の視座の欠落から、まだ十分には回復していないわけである。その政治的、経済的な基盤との関係について、日本文化史の問題としても、もっと研究されるべきことと考えられる。

#### 四 右の他の、航海者ないし海洋民の

##### 文化にかかわる事象

ほかにも、航海者ないし海洋民の、身を海上に置き、海域内の事物に関心を集中させた作品の例が、さまざまある。

(初略) 十棚船接ぢ浮きて 銀 櫓しぎやびて 黄金柱し立て、(中略) 大和海の真海中ない 泥海に走り込まちえ 泥海ん別き出ぢやちえ (中略) 沖の潮の潮荒さ 辺土の波の波荒さ (五七ウンチャミのクエーナ (国上村辺土名『南島歌謡集成』I 沖縄篇上 P 二四四))

(初略) 銀柱や 押し立てて 順風帆や 曳下げて 黄金柱や 押し立てて 十棚舟 接ぎ浮けて

浮きて見れば 浮き美らさ 走らち見れば 走い美らさ 泥海に 走いさがて 泥海に 分き出ぢやらやまと泊 着いぢやびたん 玉かはら 我が拝がで 拝領また戻りんや 奥の潮や 波荒らさ 辺戸の潮や 波荒らさ (後略) (七十二クライのクエーナ (国頭村比地)『南島歌謡集成』I 沖縄篇上 P 二五四。類想歌へウムイ一〇八、一〇九、一一八、一三五、一八八、一九二、二二二、二六〇、二六四、四七九など) がある。

(初略) 八棚底 押浮けれ 十棚底 押浮けれ (中略) 銀柱 押し立てれ 黄金柱 押し立てれ 御肝選で乗せわちへ 手楫選で乗せわちへ 赤ら帆引ち立てれ 真白帆引ち立てれ 海見れば波荒さ 天見れば雨天 腕上けしち漕かわちへ 袖上しち漕がわちへ (ウムイ八九フネコチブシ (金武間切)『南島歌謡集成』沖縄篇上 P 三六四。類想歌 (二六八、二九二など) がある。

○エーおせく 船頭さんもかーこもエー 押せば 港がノー ヤレ 近こにやなるエー。(大三島町、上浦村瀬戸崎『愛媛の民謡』(尾道市山波町 豊田郡川尻町『広島県の民謡』

○ヤール おせく 船頭もヨール 水夫もヨール 押  
さにや登らぬ ヤール この瀬戸は アラ ヨール  
トサツサく (木やり節) (上浦町井口『愛媛の民謡』  
(豊田郡大崎町 因島市『広島島の民謡』)

○ヤール おせく 船頭もかーこもヨール 押さにや  
上らぬ (こされぬ) ヤール (ヤール?) この瀬戸は  
ヨール。(大三島町明日『愛媛の民謡』(岡山県児島市下津  
井 岡山県笠岡市『日本民謡大観』中国篇)

○ホーイ 船は新艘でも櫓は唐木でもヨール 押さ  
にや上らぬこの瀬戸はヨール。(大三島町肥海『愛媛の  
民謡』(広島県尾道市山波町 福山市走島 安芸郡『広  
島島の民謡』)

右のような、帆や櫓にかかわる歌詞の例がある。  
また、

(初略) 赤那口 通んど 我船 早先 何程しど  
通りぶるかやて 先はら 見らて見りば 先はら  
切しる 潮や 干瀬波ぬ 折るにん 二十歳乙女  
ぬ 笑にん 折な折居ば 余ぬ嬉ん 舵問ぬ舵うし  
て潮見りば 貢布ば うち広にん 十尋布ば う

ち広にん 通りぶりば 余ぬ嬉ん 中真はら 見ら  
て見りば 釘頭な はかる潮や 月夜照し ぴゅ  
ま照し居ば 余ぬ嬉ん 走んな走 行んな行(後  
略) (五九南風保多ふんたか(黒島)『南島歌謡大成』IV  
八重山篇 P一四八『黒島民謡集』)

(初略) 出だしんな 出だしなば 走らしんな 走  
らしば 御神崎 行きんな 羊ぬ崎 浪荒らさ  
ありぶり 風強さ やりぶり 船かいさ まぶなじ  
い 路かいさ 女童(後略) (二〇七中山じらば(黒  
島)『南島歌謡大成』IV 八重山篇 P二六八)

○ここは瀬じゃく 瀬の先や渦じゃ 錨おろして  
汐だるみ。(越智地方 大三島竹肥海『愛媛民謡集』)

○若衆よく 船越ばなの空見なれ いなさ(東南  
強風)の雲が飛んで来た ヨイセく。(南宇和地方  
西海町内泊『愛媛民謡集』)

右のような、風や、波ないし潮流にかかわる歌詞の例  
がある。

これらは、いずれも、船乗りでなければ起こせない種  
類の発想に立ったと考えられるものであるが、その全貌  
についての考察は、本土ならびに南島全域にわたる資料

を精査して述べる予定である。

## 五 まとめと展望

日本列島内で生きてきた人々の立ちうる視座のうち、少なくとも一つのが、ある時期まではたしかにあって、そのあと主流ないし表面からはほとんど姿を消し、復活といってよいほどの目だった回復の姿は見せずに現代にいたっている。——こういう「ことの次第」が、ますます彫りを深めてきたように思われる。

右の変化には、もう一つのこと、すなわち、人間のからだの姿をそのソトがわから描き出すという視座が、「ある時期」までは右の視座と併存し、「ある時期」以後、まるで右の視座と運命をともにするかのように作品にあらわれなくなり、その後近代にいたってやっと回復の姿を見せはじめる、という現象がともなっている。この二つのことがらの関係、ならびにそれぞれについてのさらにくわしい探究も、これからの課題である。

## おわりに

さきに書いた「ヒナとアヅマ——古代文学に見える日本の地理区分について——」（『追手門学院大学文学部紀要』第三四号、一九九八（平成一〇）年二月）と同様の「前史」が、本稿にもある。

一九八三（昭和五八）年一月、愛媛大学法文学部を会場として行われた日本歌謡学会大会で、「民謡と海——愛媛とその周辺——」と題して口頭発表したものが本稿の前身である。そのときの口頭発表の内容は、愛媛県と広島県の民謡のことを主とし、その他の本土諸地域の民謡のこと、および南島の歌謡のことを加え、視座の変化のこと、日本古代史のことに及ぶものであった。すぐに文字化しようと考えたが、日本古代史についての論述を加える必要があり、当時の段階でそれを加えると、それだけでかなり長大なものになると見込まれたので、まずその日本古代史についての論述を別に発表し、歌謡、民謡に関することはそのあとにまわすことにした。

そののち、日本古代史について、いくつもの論考を書き、ともかくひとわたりは論述し公表したように思われ

るので、日本古代史に関することはそれらの論考にゆだねて、ここに、ひとまず、視座の変化のを中心に、南島歌謡のことを述べ、本土諸地域の民謡のことを言い添え、それぞれ、ことの入り口の骨格にあたるところだけを書いておくことにしたのである。

日本文学史の全体にわたって、なお残された問題は多くあり、あらたな問題もつきつきと立ちあらわれてきつつあるのであるが、それらはすべて、やがて順を追って発表されるであろう。

#### 補記

一 日本文学、日本古代史についてすでに書かれた筆者の論

#### 二

考の目録は、「アジア文化学科年報」の本号以前の号にも掲載されているので、重複を避けて、ここには枚挙しない。

引用は、『古事記』・『万葉集』は『日本古典文学大系』、『続日本紀』と他の和歌は『新 日本古典文学大系』、『おもしろさうし』は『日本思想大系』、その他の南島歌謡は『南島歌謡集成』の歌詞原文に（ただし仮名書きのものはその書の訳文によって適宜漢字をあてた）、本土の民謡は『愛媛の民謡』（愛媛県、一九五九〈昭和三四〉年）、『広島県の民謡』（広島県、一九八三〈昭和五八〉年）、『日本民謡集成』（日本放送協会、一九八〇〈昭和五五〉年）に、それぞれよった。

（二〇〇一（平成一三）年六月二八日）